梓川公民館報

上大妻高齢者クラブに県知事表彰

令和２年10月、高齢者福祉分野団体の部で県知事表彰を受賞した、上大妻高齢者クラブ『喜楽会』の皆さんに活動の話を伺いました。

当クラブの受賞理由の一つである、昭和32年４月の発足以来、地域での対象者85％の加入率を維持している理由はなにか。

それは、役員13人が中心となって、市・地区などの事業に積極的に参加を促し、集落センター周囲の清掃作業には毎回30人ほどの参加があります。また、会員は男性27人女性48人の計75人で、男性会員が多い。上大妻町会は同じ名字が多いので、名前で呼び合っていて、会員の誕生日には会長が飴のプレゼントを持って訪ねている。このときの会話を楽しみにしている会員が多いそうです。こうした日ごろの繋がりが、集落センターでのお花見や親睦旅行、子どもたちとしめ縄講習会によって、より強くなっていると感じました。取材のときには、役員の方が手作りの菓子と漬物、お茶を用意していただき、楽しくお話ができました。

青木忠孝会長に今後の抱負を伺うと、「地域の中でも高齢者の集まりの場として重要性を認められ、なくてはならない団体となっている。会員の絵画、短歌、俳句、川柳などの文化活動が盛んなので、会としても助力していきたい。また、百歳体操や、しっかり歩くことで健康づくりをして、皆さんと元気に過ごしたい」と話していました。

▲青木会長（前列右）と役員の皆さん

梓川の世帯数・人口

世帯数	4,746戸
人口	12,516人
男	6,172人
女	6,344人

（令和３年.9.1現在）

NICE GUY

消防団は地域の頼れる存在

8月14日の大雨は梓川にも被害を残しましたが、この自然災害や火災発生時などに、地域の消防活動の一翼を担う消防団は、建物火災の消防活動のほか、災害時に私たちの避難誘導なども行っています。平常時は、訓練や消防機器の点検を行い、いつ起こるか分からない災害に備えています。

第39分団へ訪問した日にも、火災現場と同様に暑い炎天下で、銀色の防火服、長靴にヘルメットを着けての放水訓練、手動破砕機による破砕訓練に汗をかきながら取組んでいました。

二木分団長は「貴重な時間を使う訓練は終了時間を予め皆で決めてあり、住民の生命と財産を守るという強い気持ちで、集中して取組むようにしている」と話していました。

こうした消防団員の熱い使命感が私たちの暮らしを守り、頼れる存在になっていると感じました。

消防団員募集中　松本市消防防災課（33-1191）

▲災害に備え放水訓練をする消防団

梓川アカデミア館探訪

生命の輝きを描き続けた「上野 玄春」

第３回目の梓川アカデミア館探訪では、生命の輝きを描き続けた画家、上野玄春さんを紹介します。上野玄春さん（1946年－2004年）は栃木県生まれ。1970年、東京教育大学芸術学科、現代思潮社が主催する美学校を卒業。20代は不眠症に悩まされ、浅い眠りのうちに見た夢を、絵画や詩に記述をする日び。ダリの絵画作品のようなシュールレアリズム（超現実主義）を追い求め、画材も油彩絵の具を用いていました。77年に都内の中学美術教師の職を辞し、自己再生の道を求めてインドへと向かい仏教とヨーガを学びました。宗教的な構図や題材を描かなくても自然を描くことで根本の生命力を表現できると気づき、この頃から日本画材を用いて生命力に満ちた草木を描き始めます。帰国後は院展の加藤勝重氏に日本画を学び、85年に身延山（山梨県）にて修行の後、日蓮宗の画僧となりました。94年、当時の住まい埼玉県浦和市から、長年探し求めていた自然あふれる地・梓川上野へ移住。美しい自然の中に身を置き、仏教、ヨーガ、絵によって生命をはぐくんできました。

梓川アカデミア館には48点の寄贈作品を収蔵しています。

「おとずれ」1992年
岩彩82.0×171.5cm

こまち町会長を長年務めた
村松敏夫さん

村松さんは、平成14年から令和3年3月までの19年間こまち町会の町会長を務めました。町会発足当時から令和の時代まで携わった中で、嬉しかったこと、大変だったこと、これからの町会に期待することなどを伺いました。

Q 退任されて3カ月が経ちましたが、今どのような気持ちですか。

A 19年間は長すぎた。新しい町会長に期待しています。残念に思うことは、発足直後の新町会では建設資金の問題で公民館を建てられなかったことです。公民館がないために、こまち町会の役員会議の度、住民の方には梓川公民館まで来てもらい苦労をかけてしまいました。大きなことを決める時は、まとめることが大変でしたが住民の皆さんの協力があってとても助かりました。住民の方には感謝しています。

▲19年間町会長を務めた村松さん

Q 平成14年の「こまち町会」発足時、町会名はどのように決めましたか。

A 当時は南安曇郡梓川村で、旧梓川村の村花コマチソウから名付けました。現在も春になると梓川の堤防や河川敷などに赤く小さな花が咲き誇ります。

Q 公民館の建物がないことで、工夫したこと、困ったことはありましたか。

A 子ども会などが活動する場を作れなかったので、公民館や集会所などがあれば行事のあとの慰労会などもできたと思います。

Q こまち町会に期待することはありますか。

A 世帯数が少なく、年代がかたまっていて会社勤めの住民が多いため、役員の成り手が少なく新しい町会長も他に役員などを兼務しています。また、こまち町会は年に3回草刈りをしているので衛生部も大変な役員です。町会の役員の皆さんは、勤めながら役員をするのは大変かと思いますが、こまち町会をより一層よくするためにがんばってくれることを期待しています。

村松さんは奥様と二人三脚で町会長を務めてきました。何かあれば身近にいる奥様に相談してアドバイスをもらい、たくさんの協力者がいなければここまで務めてこられなかったと笑顔で話していました。

文化書道師範認定教場
濤和書道教室

梓川上立田にて、40余年に渡り地域の子どもたちに書道を教える布山濤泉師範に、開室当時のお話を伺いました。

▲書道を教える布山濤泉師範

Q 書道教室を始められたのはいつ頃ですか。

A 開室は、昭和52年7月で、私が39歳の時でした。

Q 当時の様子を教えてください。

A 22歳の頃より、自分の勤務先に書道を教えてくださる方が居て興味を持ち、師範の免状を取り、現職を持ちながら開室しました。習いに来る子ども達は、多い時で50人ほど。当初は、濤泉書道教室でしたが、教室の一期生だった実娘の和華が師範に加わり、教室名を濤和書道教室に変更しました。

Q 今までの大変だった事と良かった事を一つずつ教えてください。

A 大変だったのは、現職の不規則な勤務時間の合間をぬって教室のための時間を工面するのが大変でした。良かった点は、純粋な子どもたちと共に勉強できることですね。

濤和書道教室は毎週土曜日の午前8時～12時まで教場全国大会 年2回程実施しています。

▲布山濤泉師範と水谷和華師範

雑記帳

カナブンは、クワガタやカブトムシとともに、広葉樹の樹液に群がる昆虫として有名だ。とはいえ、野菜に害をもたらすコガネムシなどと形も似ているせいもあるのか、好まれる存在ではないかもしれない。このカナブンの数が最近減ってきているという。

カナブンは樹液や腐った果実を餌としており、野菜を食べることはないようだ。幼虫も腐葉土を餌としており、土壌を改善するという。畑の土の中で葉や根を食いちぎる白いイモムシも、コガネムシの幼虫であることが多いようだ。一方、カナブンの幼虫については、どこで育つのか長年不明であったが、ようやく10年ほど前、その謎が解けた。

カナブンの幼虫は、荒地などに広がる葛（クズ）群落の葉の下に生息するという。葛が群生するような土地の減少、樹液が出るような若い広葉樹の減少など、自然環境の変化により、数が減ってしまったようだ。カナブンのことを思うと心が痛むが、これからの季節はムシンで草を刈るしかない。